10/20/2006

＊キリスト教学特殊講義＊＊＊＊＊　　S.　Ashina

１　宗教とは何か

１―１：古典的宗教哲学とその限界

（１）What Faith Is Not.（Paul Tillich, *Dynamics of Faith* 1957, in: MW.5）

The Intellectualistic Distortion of the Meaning of Faith

an act of knowledge that has a loe degree of evidence

The Voluntaristic Distortion of the Meaning of Faith

an act of will

The Emotionalistic Distortion of the Meaning of Faith

（２）啓蒙主義と理神論

・啓蒙主義の思想的意義：絶対主義批判、理性の自立性・人権、普遍主義、人間解放

自由と自律(autonomy)　→　国家と教会という他律的権威への批判

啓蒙的理性の合理性と普遍性の主張

・カントの宗教論：啓蒙と啓蒙主義からのずれ

実践理性と宗教　→　神学のカント主義と神学の倫理化

宗教とは意志・決断の事柄である：道徳・定言命令と根本悪

・シュライアマハー『宗教論』の信仰概念

宗教の本質について（宗教本質論・第二講）は、形而上学／倫理学ではない。

→「直観・感情」（「本質－現象」の枠）

①宗教・信仰の直接的場へ「感情」「直接意識」　→　宗教現象学へ

②人間性における宗教　→　弁証神学、宗教の本質概念（本質論から現象論へ）

③「感情」から「認識」「行為」へ　→　人間の存在構造における宗教性

④実定性　→　個別的で歴史的な諸宗教への定位　　cf.　理神論

（３）本質論の評価

１．本質論と実体形而上学（実体と属性）

２．実体的定義の長所と短所

長所：わかりやすい、宗教の範囲を厳密に規定できる

短所：狭すぎる、宗教現象の動的な変化を説明できない

３．宗教の概念規定は、実体的定義だけではうまく行かない。

（４）実体形而上学からの離脱

１．罪や救済の実体的理解：罪概念の基礎にある物質的イメージ

実体　→　計量可能（数的・量的）　→　移動可能　→　交換可能

２．宗教内部における実体的枠組みからの離脱

罪・救済を神と人間の関係の事柄として捉える態度、ルター、キルケゴール

３．機能的関係論的規定へ、基本的カテゴリーとしての関係

１ ― ２　意味論から宗教論へ

（1）ウィトゲンシュタインの宗教論

－実体論的本質主義への批判－

A．ウィトゲンシュタイン哲学の展開

１．『論理哲学論考』と『哲学探究』という二つの著書に示される対照的な
　　二つの言語哲学

（1）前期ウィトゲンシュタインと論理実証主義

「言語が有意味であるためのア・プリオリな条件は何か」という問い、言語の有意味性の限界を明らかにすることによる思考の限界の解明

「言語が意味をもつ」とは、言語が世界内のなんらかの事象を描写し、個々の文の真理値が問えるようになっていることが必要になる。→言語が確定した真理値を取りうる条件を求めること

２．論理実証主義：客観的な手続きによる実験と自明で明証な命題からの演繹
　　物理学と数学

３．言語が平叙文の集合／平叙文は名前の連鎖から成る／名前は実在的な対象を指示する／平叙文の名前の連鎖の構造が外的世界の事態のあり方を写像的に示している／平叙文は外的事態の像であり、その像の真偽は外的事態と突き合わせることによって一義的に確定できる

４．宗教言語に有意味性は認め得ない

５．前期の言語哲学の問題点：

・言語の構成単位を名前の連鎖と見るのは適切か
　　命令、約束、感嘆、などなど

・言語を均一的な論理に支配された統一体と見る見方の背後に、言語の使用者をある種の超越論的形而上学的な唯一者と見る想定が隠されていないか。唯一の論理空間の存在の仮定は、この論理空間を表象する唯一の主体という独断的な形而上学的前提がある。

６．後期ウィトゲンシュタイン：言語ゲーム論

　言語とは記号そのものではなく、記号を用いた行為である／この行為は複数の主体が参加して行う相互交渉である／言語を成り立たせるのはこの行為の進行を規定する規則である。この規則は共同体内でそれが通用しているという事実（われわれが規則を用いて行為し、それに従って行為を規制し評価し教育したりしているという事実）のみが、規則をの規則たらしめ、言語を言語たらしめるのである／言語はその規則によって様々な種類に分かれる。ゲームに無数の種類があるように言語行為にも無数のヴァリエーションがあり、ゲーム全体にゲームの本質といわれるような本質が存在しないように、全言語ゲームを通じて見出されるような言語の本質はない。あるのは、互いに「家族的類似性」をもってゆるやかに関係しあっている無数の言語ゲームのネットワークのみである。

７．宗教は独自の言語ゲームという点で、有意味であり得る。

B．ウィトゲンシュタインの宗教論

８．宗教とは

言語ゲームは、共同体的において事実として生きられている行為の集合体（＝「生の形式」）の内で成立する行為の規則（＝文法）であり、他の言語ゲームと家族的類似性において関係し合っている。

宗教も、こうした言語ゲームの一つであり、それ独自の規則において営まれる共同体的な行為であり、その有意味性はそれ自体の中に根拠を有しており、他の別種の言語ゲームによって根拠づけられることはできないし、また必要もない。

９．言語ゲームの自律性

言語ゲームあるいはわれわれの生の営みの根底にあるのは、根拠なき信念（一切の判断の基盤としての根本命題、fundamentaler Satz）であり、行為である。根本命題はその言語ゲーム内では誤謬をまぬがれており自明である。根本命題の誤謬の可能性を論じることは言語ゲームの取り違えに他ならない。これが疑われるとき、われわれにとって確実な判断など存在し得なくなる。

10. ウィトゲンシュタイニアン・フィデイズム

言語ゲーム相互の関係：自律性と透過性（コミュニケーション可能性）

インターナリズム：自律的体系としてのキリスト教言語ゲームを重視、透過性を軽視
外在的基準は宗教的信念にとって妥当性をもたない

エクスターナリズム：言語ゲームの自律性より透過性を重視、諸言語ゲーム全体をみわたす位置に立つ（神の視点）

11. 実体形而上学的な本質論（実体的規定）とは別の視点

唯一の実体的な本質ではなく、家族的類似性による関連づけ

12. 問題点

・独立した言語ゲームは一義的に確定できるのか、どの範囲が言語ゲームとしてのまとまりを有する単位なのか。
宗教か、キリスト教か、教派か、小サークルか（個人ではないとしても）

・宗教間に対話は可能か：インターナリズムとエクスターナリズムのジレンマを越えて
言語ゲームの自律性は、相互理解の不可能を帰結するのか
家族的類似性というからには、類似を判断する場・基準が存在する
人間は複数の独立した言語ゲームにコミット可能であり、諸個人は日常性と言いうるような共通性を確保しうる。日常性を介した対話

＜文献＞

１．ヴィトゲンシュタイン　『論理哲学論考』（＋『哲学探究』抄訳）法政大学出版局
２．星川啓慈　『ウィトゲンシュタインと宗教哲学　言語･宗教･ｺﾐｯﾄﾒﾝﾄ』ヨルダン社
『言語ゲームとしての宗教』勁草書房
『禅と言語ゲーム』法蔵館
３．間瀬啓允　『現代の宗教哲学』勁草書房
「分析哲学とキリスト教」「ウィトゲンシュタインの宗教言語論」
４．小山宙丸・田丸徳善・峰島旭雄編　『宗教の哲学』北樹出版
５．島薗進・鶴岡賀雄編　『宗教のことば』大明堂

６．藤本隆志・伊藤邦武編『分析哲学の現在』世界思想社
７．丸山高司編　『現代哲学を学ぶ人のために』世界思想社

（2）ニクラス・ルーマン

１．実体的規定から機能的規定へ
２．現代社会学の展開：パーソンズからルーマンへ
　構造－機能主義から、機能－構造主義へ。システム・構造・機能
　　構造－機能主義：特定の構造をもった社会システムを前提に、社会的に形成されたものの存続を可能にするのにどんな機能な働きが必要かを論じる。社会システム存続のための機能分析。構造・適応・均衡・安定性というキーワード。現状の正当化という傾向。
　　機能－構造主義：機能概念を優先させる。社会システムは特定の構造（価値範型や構造範型による）によっては定義されない。社会システムとは相互に指示し合う社会的行為連関である。自己組織化による構造の生成過程。
３．パーソンズ
・社会システムの均衡理論（行為体系。有機体的世界、超経験的世界、物理・化学システムと接する）
　　適応（A）：システムが維持するために、状況を統制する手段を提供する。経済
　　目的達成（G）：行動によって充足・達成される目標を設定する。政治。
　　統合（Ｉ）：メンバーを相互に結びつけ規範的統制をはかる。組織、ネットワークの領域。道徳・法律・慣習。
　　潜在的パターンの維持と緊張の処理（L）：メンバーの内面における文化・価値・規範意識・アイデンティティを形成保持する。
・宗教は行為システム内のいずれかのサブシステムに帰属するものではなく、すべてのサブシステムと直接関係する。しかし、制度化された宗教は、Ｌの部分に位置づけられる。一般的に宗教の機能はパターンを維持するという精神的面での統合機能と、システム維持に危険な不満をそらせる機能をもつ。
　　人間の条件：物理・化学システム（A）、人間的有機体システム（G）、行為システム（Ｉ）、超経験的世界（L）
　　行為システム（Ｉ）：行動システム（a）、パーソナリティシステム（g）、社会システム（i）、文化システム（l）
・文化システム（中期）と超経験的世界（後期）とに関わる宗教

４．ルーマン
　社会：有意味なコミュニケーションのもっとも包括的なシステム
　　環境－システムの境界
　　自己参照的なオーポイエーシス・システム（意味システムと自己参照）
　複雑性と複雑性の縮退
　　可能性の選択作用としての意味機能

５．ルーマンの宗教論

自己参照的システムのパラドックス（根拠付けにおける無限遡及）

意識・精神・コミュニケーションの構造としての自己参照性

システムの全体性は、システム内部からは到達不可能

↓

宗教：パラドックスの脱パラドックス化機能

システムを外部から観察する視点（超越的視点）を設定しパラドックスの存在を顕わにするともに、暗号化によってこの規定不可能性を規定可能なものへと変換する（パラドックスを解く）。

罪／赦し　　死／永遠　　不幸／癒し

６．意味世界の根拠づけ機能としての宗教とその象徴化（具象化・イメージ化）

根拠：正当化と批判の二重性（イデオロギーとユートピア）

７．宗教とは、意味世界の正当化・根拠付け機能の担い手である（広義の宗教）。

＜文献＞

１．小笠原真『二十世紀の宗教社会学』世界思想社
２．中　久郎編　『現代社会学の諸理論』世界思想社
３．今田高俊　『自己組織化　社会理論の復活』創文社
４．飯田剛史　『在日コリアンの宗教と祭り　民族と宗教の社会学』世界思想社
５．土方透編　『ルーマン／来るべき知』勁草書房
６．高橋徹　『意味の歴史社会学　ルーマンの近代ゼマンティク論』世界思想社
７．村中知子編　『ルーマン理論の可能性』恒星社厚生閣
８．ルーマン　『宗教社会学　宗教の機能』新泉社、『システム理論のパラダイム転換』お茶の水書房、『自己言及性について』国文社、『宗教論』法政大学出版局
９．芦名定道・小原克博　『キリスト教と現代』世界思想社